

ジェンダーと人間の安全保障 軍縮外交の現場から 猪口 邦子

こんにちは。今日は、このように大変熱心な大事な会合でお話できますことを楽しみにまいりました。



今日は、国際的な観点からの会合と承知しておりまして、海外からのVIPほかお客様方も多いので、もしお許しいただければ前半部分を英語でやらせていただきまして、その簡単な要約を後で日本語でもお伝えします。またそのフォローアップを日本語で後半いたしますので、最初の軍縮外交と女性と人間の安全保障というところを英語でさせていただきたいと思います。なお、英語の正式なスピーチの紙を用意し

てございます。事務局のほうに提出してありますので、ご希望の方はそれを入手されてください。それから私の公式サイトにも、それを東京に戻りましたらすぐアップロードしておきますので、「Yahoo!」から猪口邦子と入れていただくと、私の公式サイトにすぐ入りますので、そこでこの紙をご覧いただきたいと思います。

それでは、海外からの方もいらっしゃいますので。

末吉市長、片山議長、講演者と仲間たちとこの都市の紳士淑女の皆さん、今朝皆さんにお話できることを大変に光栄に思います。まず初めに、この会議のオーガナイザーの皆さんにお祝いを述べたいと思います。世界中の様々な都市でこういった会議を開催することは大変重要な一歩です。北九州市がこの点で第一歩を記したことは十分に認識されるべきでしょう。

国連軍縮会議の元特命全権大使、昨年、国連第一回小型武器中間会合の議長として、今朝はこの「ジェンダーと人間の安全保障」に焦点をあてたいと思います。なぜならば、軍縮と調停は人間の安全保障にとって重要な基盤だからです。これは実際、多々の問題の最前列に位置していますし、戦火に引き裂かれた多くの社会において、紛争後の復興の根底に据えるべき事項です。

しかし、今日まで国際社会は軍縮と平和への努力におけるジェンダーの局面にほとんど注意を払ってきませんでした。ジェンダー問題はしばしば見過ごされ、誤解されていました。ジェンダーの違いと不平等とを明確に理解していなければ、紛争後の発展に十分な対応ができません。

ジェンダーは時代や文化を超えた要素です。家族、共同体、国家全体の姿勢や言動の基本を形成し、経済、政治、社会関係および個人のニーズに影響を与えています。

不安に対する戦いの中心はジェンダーであることが、紛争中のコミュニティレベルの暴力やその結末からわかります。

さて皆さん、女性と子供は、紛争による不当な重荷を負っており、今日の犠牲者の大半を占めることもしばしばあります。例えば、1990年代の戦争に関連する、推定400万人の死者のうち、市民は90%で、さらにその80%が女性と子供でした。彼らの大半は、小型武器や軽火器の誤用による犠牲者です。女性は暴力のターゲットとなることが多く、紛争後の貧困や未開発の影響の矢面にさらされます。教育、健康およびその他の主唱といった、女性の生活を向上させるために費やされるべき費用が、武器のための資源に流用されたことによって状況はさらに悪化しています。

それにもかかわらず、女性が紛争後の主導権を握ることや、紛争後の局面において優先事項の決定について発言することはまれです。大方の場合、彼女たちは軍縮決定や和平交渉が行われる多くの重要なフォーラムに参加できず、結果、女性の観点が見落とされてしまうといった傾向があります。

ジェンダー関与と女性のエンパワーメントは、より効果的な軍縮戦略や紛争後の再建、および人間の安全保障を備えた社会の発展を促進することでしょう。交渉や紛争後のプログラム、福祉プログラムに参加するための政治的専門知識と技術を伸ばすことをより多くの女性に奨励しなければなりません。女性の積極的役割は、和平プロセスに大変有意義な影響を与えることができます。過小評価すべきではありません。女性は紛争の解決を求め、暴力を拒否し、食料の安全性を確保しようと努めます。戦時中の犠牲者や、軍縮の届かない状況における犠牲者を介護し、倫理的、文化的価値を管理します。家庭やコミュニティ、そして国家レベルにおいて人間の安全保障を見張る重要な役割を担っています。

冷戦後時代と現在の戦争、あるいは紛争の性質の違いについて意見を述べさせてください。冷戦後、暴力紛争の特徴は、かつての国家間の紛争から根の深い国内の紛争へと変化しました。国内紛争にはあらゆる社会階層が関与し、草の根レベルで個々のコミュニティのメンバーが含まれます。このような根の深い分裂やコミュニティ内の憎しみに十分に対処しなければ、同じような軍事衝突の再発を阻止することは不可能です。そのため、多くの紛争が今日も繰り返されています。

紛争の性質がこのように変化したことによって、和平に向けた政治的な調整だけでなく、コミュニティレベルでの社会的和解も必要になっています。草の根レベルでの和解、またコミュニティにおける男女を問わない和解を含む、あらゆる政治社会レベルでの和解が、暴力紛争の終結と戦火に引き裂かれた社会再建のカギとなります。

現代における戦争の特徴には、小型武器と軽火器の大規模な拡散が影響を与えています。小型武器は人間の悲劇、人と人との間の憎しみを増幅し、長引かせています。大規模な国際的武力衝突は沈静化したように見えますが、地域的な民族対立や憎しみにもとづく内戦は、人々の安全保障により一層の影響を及ぼしています。したがって数多い人間の不安の原因となる要素の中で最も直接的な脅威は、非合法で過剰な武器の存在と、それが紛争後の地域内で相次いで非合法拡散していることです。それらが紛

争を長引かせ、暴力を増幅し、人間の悲劇を長引かせ、犯罪とテロリズムを増大させているのです。

根の深い紛争からの再生を試みる社会において、和解を促進する視点を持つ軍縮プログラムを計画することが重要です。そのようなプログラムを計画する上でジェンダー関与は役立つでしょう。

さて次に、ジェンダーを包摂した、コミュニティに基盤を置き、かつ人間を優先とする小型武器軍縮プログラムを計画する際に重要な要素をいくつか提案します。しかしこれは単なる可能性の表示であり、各種の軍縮プログラムにおいて実施できるはずで

まず、私たちが参加型アプローチと呼ぶプログラムについて述べます。参加型アプローチは、男女がともに関与する重要なアプローチです。紛争に続く和平、再建および和解プロセスにおいて、男女の代表者数が不均衡なことがしばしばあります。再建における女性の参加と完全なジェンダー主流化が保証されなければなりません。社会的ニーズや社会的条件に関する地域女性の知識を認識することによって、プログラムの質を高め、豊かにするよう支援します。つまり、プログラムを支援します。女性は、軍縮と軍備管理目標を実現へ向けて転換するのに大きな可能性を持ち、その実施においても大変重要です。女性が和解プロセスを促進することもしばしばです。

女性に政権に参画する機会を与え、和平プロセスおよび紛争後の再建計画の中でもっと公平な役割を与えるべきです。意思決定層に女性が参加することは不可欠です。そしてもちろん、女性は母親として和解に重要な役割を果たすことができます。

次にインクルーシブ・プログラムと呼ばれる、女性、少年兵もしくは元少年戦闘員を含めた社会全体のインクルーシブネスについて。皆さんすべてご存知のように、小型兵器や軽火器は大変小さくて軽量なために、子供を兵士にすることができます。そのため、冷戦後の今日の紛争でまず犠牲となるのは、子供たちです。冷戦後の時代に、小型兵器はコミュニティの中に残り、それによって多くの人々が死んでいます。また、小型兵器は子供を兵士へと変えてしまう武器でもあります。兵士すべてが男性や少年ではありません。女性や女兒も武器をとり、多くの紛争で武器を持って戦うことを強いられています。しかし紛争後、復興プロセスや再構築プロセスと呼ぶプロセスからは、それがどんなものであれ、女性や女兒は常に締め出される傾向があります。さらに、紛争に直接関与していない女性や子供にも、紛争後のプログラムの中に十分な場を与えるべきです。参加規定、女性や女兒が参加できる機会の提供は、再建プログラムに利益をもたらすはずで

彼女たちが持ち込む多様な視点、あるいは異なる考え方が、プログラムの意義を高めるでしょう。私はむしろ、多くのプログラムにおいて、女兒を含めた少年兵の復帰あるいは再統合に全力を注ぐ、集中することが必要だと思います。

3番目のアプローチは、いわゆるボトムアップ・アプローチです。ボトムアップ・アプローチは和解に推進力をもたらします。平和の構築および兵器廃絶に向けての推進は、上からの指示ではなくコミュニティレベルからコミュニティのメンバーが率先

して行うべきです。そうすれば武器を共通の敵と見なし、非合法武器の莫大な非合法拡散を打開できるでしょう。この戦略を通して、コミュニティは軍事的な生活から平和的な生活に移る合意を形成することができます。

女性はこの分野でも重要な役割を演じることができます。女性が意見を言うことができれば、異なる意見や異なる焦点の優先事項を持ち込むことができます。男性や少年の手から武器を取り上げるのは、しばしば女性たちです。私たちが行っている小型兵器の収集、破壊プログラムは、コミュニティに集積された武器を放棄するのに大きな役割を担っています。

最後のアプローチは、いわゆるコミュニティを基盤とした総合的アプローチです。女性も含めたコミュニティのメンバー全てが、プロセスにオーナーシップの感覚を持つことは大変重要です。しかしジェンダーは社会のインクルーシブネスの中で唯一示すことのできる要素です。ジェンダー問題は、女性を孤立したカテゴリーとして眺めたのでは取り組むことはできません。女性問題への関与とは、他の多くの個別のカテゴリーに関与することを意味しているのです。

総合的アプローチでは、子供、青年、年長者、教師、両親、祖父母、身体障害者、村長およびメディアを含めた全てのメンバーのニーズに焦点をあてなければなりません。コミュニティを画一的に取り扱ってははいけません、むしろ多くの異なる多様なグループから形成された集合体と見るべきです。そして、敬意を持って多様性を迎えることが必要です。

紛争が終結した後の、重要な要素が数多く存在する多面的世界における男女平等を検証するにあたり、この講演をこのように締めくくりたいと思います。和解は、21世紀の戦争と平和の問題のカギです。多くの紛争には、単なる和平協定だけではコミュニティに平和をもたらすことができないほど深い憎しみが刻み込まれています。和解の概念に集中すると、必要なことはコミュニティに多様な要素を持ち込むことであると気づきます。そのような背景の中で、ジェンダー関与はきわめて重大です。ジェンダー関与はその可能性を拡げ、和解の兆しになると思います。

以上が皆さんに対する私の最も重要なメッセージです。ここからは日本語でお話させていただきます。

今、お話ししました通り、21世紀の戦争と平和の大きな特徴というのは、女性と子供が最大の被害者になっているということです。20世紀というのは、非戦闘員の戦死が兵士の戦死を上回ったということが衝撃でしたが、21世紀になりますと、あるいは20世紀の最後のところになりますと、女性と子供の戦死が男性の戦死を上回っているのです。国連の発表ですと、その割合が7割。その理由は、今、英語のステートメントの中でも申しましたけれども、根本的には小型武器のような重量型ではない通常兵器が、戦後政府によって回収されず、非合法拡散を遂げ“Post-conflict”の社会においての殺りく手段になっていて、非武装の無防備の女性と子供がターゲットになるからです。これは、アフガンでもイラクでもコスボでもボスニアでも、非常に広く見られる現象なのです。

このことに対する一つの解決策は、今日の紛争は、特定の政治目的を越えた憎悪の念に根差す、非常に根の深い“ Deep-rooted Conflict ” と呼ばれる面がありますので、和解プロセスの構築が必要ではないかということなのです。つまり、今までの20世紀の戦争は、政治指導部間の特定の政治目的や覇権をかけた戦争だったので、その政治指導部間において和平協定を結んでもらえばそれで戦争が終わったわけです。殺りくは止まるわけですが、今日においては和平協定だけでは戦渦がやまないという、この問題があるのです。

そこで社会各層を貫く和解のプロセスを同時に立ち上げないと駄目なんです。例えば今、日本は国連安全保障理事会の常任理事国になりたいと政府は名乗りを挙げていますが、この安全保障理事会というところが何をやるかと言いますと、これは戦争を防いだり、あるいは戦争が起こった時に早期終結させるのです。今までの安保理のままですと、これからの戦争を防いだり、早期終結させることができないと思われるようになってきたのです。なぜかという、今の常任理事国はいずれも軍事大国によって構成されているので、和平協定を結ばせるということは考えつくんだけれども、今日の紛争に本質的に必要な和解のプロセスを立ち上げるというところの要素がないわけです。もし、日本が常任理事国になりたいということならば、まさに和解のプロセスを立ち上げる、そういう能力がこの国にあり、そういう特別の平和への資質を日本が提供できるということを立論しなければいけないと思います。なかなかまだそういう立論が十分にはなされていないのかもしれないので、今後の参考にしてもらいたいと思うのです。

ですから、和解は21世紀の戦争と平和の問題に対する根本的な概念であり、では、人はどういう時に和解するのかということを考えて欲しいと思います。皆さんが何か深い恨みを持ったり対立をした時に、どういう時に相手を許せますかということに等しい質問です。民族同士で深い恨み、その深い恨みに根差しているから、今日の戦争というのはジェノサイド型に最後の一人までもというような激しい戦い方になってしまうのです。

では、そういう状態にある場合に、どうやって和解プロセスを構築できるか。これには一つの答えはないわけです。画一的な答えはないんです。世界のいろんな事例を見て参考にしなければならぬんです。ですから多様な要素を、平和を構築するプロセスに持ち込めるということが重要で、安保理の話で言えば、やはり軍事力だけでは不十分だということです。あるいは全く対応ができないということになるかもしれません。

要するに、もう少し多様な要素を持ち込まないと駄目で、何が効くか分からない。場合によっては、平和構築を戦後について保証するだけで、銃を捨ててくれる場合もあります。それはあまりにも貧困のどん底に長い間ある場合には、それで銃をやはり捨てようかと思ってくれる場合があるかもしれないけれども、それでも銃を捨てない場合もあります。そして深い恨みの中の民族、あるいはグループ間において和解は絶対に不可能かということ、その不可能にも思えることを成功させている場合もあります。

例えば、南アフリカの白人と黒人の対立の歴史をついに乗り越えていくプロセスにおいては、どういうプロセスが取られたかということ、真実と和解委員会というのを作ったのです。“ Truth and Reconciliation Committee ” と言うのですけれども、和解において何が重要かということの一つの答えが、この委員会の名称にあります。“ Truth and Reconciliation Committee ” 「真実と和解」委員会です。和解のためには謝ることも必要なのかもしれないけど、100回謝ってもらっても許せないということがあって、もっと重要なことは真実を共に見つめるということで、そういうことが機能する場合があります。そういうことが解決への糸口を与えることもあります。南アフリカの場合は、非常につらいプロセスではあったけれども、共に真実を見つめ合うんだということです。そうすれば魂の奥から、その謝罪の言葉というのも出てくるので、やはり真実を見つめるというプロセスが不可欠なことを示したというのが南アが示した一つの答えなのです。

その方法が、ではルワンダで機能したかどうか、コソボで機能したかどうか、いろいろと評価が分かれるのですけれども、今日国連の最前線の考え方に、この“ TRC - Method ” というのがあるのです。真実と和解方式、また“ TRC - like Method ”、準真実と和解方式で、もう少し抽象化して一般化しようとする、そういう考え方もあります。和解の時に多様な要素を持ち込むということの中に、女性はやはり多様性を持ち込む、まず最初のエレメントであるということです。女性を閉め出している社会においては、どういうほかの多様な要素を持ち込むといっても、それは空疎であろうと。人口の半分を成しているその人たちを閉ざしていながら、どういう多様性を議論するのかということになるので、女性が戦争と平和のあらゆるアジェンダに等しく参加できる。そして決定の力を持つということは、試金石であります。多様な要素を持ち込んでいるということの、そして和解のためにはそれが必要だと思います。

それから和解のためには、もう一つ自分の分野に引き寄せて恐縮ですけれども、やはり武器が身近にないということが重要です。今日の多くの“ Post-conflict ” の社会においては、非合法拡散した小型武器が大量にあります。そういう所に行けばコンビニのような頻度で非合法の武器屋がある、というような状態とも言われ、そのなかでは話し合いで非暴力的に物事を解決する、和解への努力をするというようなことはなかなか成立しにくい。ですから今のフォーマルなステートメントで申し上げたように、基本的には通常兵器の大幅な軍縮を進め、身近には兵器がないという状態を作らない限り、和解への途方もない努力を人間として払うということにはなかなかならないのだということだと思います。

それですから、結局は小型武器の問題というのは戦争と平和の本質にかかわってくるのです。小型武器の問題は、「小型じゃないか」という人は、基本的に認識がほんとはない方だと思います。そういうふうに思う方はたくさん世界中にいて、まだ新しいテーマなのでメインストリーム化することがとても大変でした。私も国連、ジュネーブで勤務し、国連総会の部分の安全保障は私の担当の分野でしたので、国連において、全世界を対象にこの小型武器の軍縮の実施のプロセスを立ち上げるということを議長としてやったのですけれども、なかなか考えをメインストリーム化していくことは大変です。

私は改めていろいろな分野で先駆者として、まだ社会の認識が甘い時代において、その分野をメインストリーム化しようとした方々の苦勞を思い知りました。それは例えば女性の分野かもしれないです。まだ男女平等が、お付き合い程度には言うけれども、それをメインストリーム化するということについては重要性を認識できていない時代において、この分野を切り開いた方々が、原先生をはじめいらっしゃいますけれども、本当に敬意を表すべき方々です。世界がまだ目覚めていない問題について、アジェンダとしてメインストリーム化していくことがどんなにか大変かということです。

かつての環境問題、男女平等問題、そして今日の小型武器が、そういうことなのかなという感じがしますけれども、そういう大変さがあります。しかし問題は現実のものであるので、実際の戦争関連の被害者も小型武器の分野で一番多く、年間 50 万人が亡くなっています。50 万人というのは、1日 1,400 人で、1分 1人ですから、もうこの会合が始まってから何百人と亡くなっているわけです。今日、戦争関連死を説明する最大の武器カテゴリーが、小型武器なのです。事実上の大量破壊兵器だと言ったのは、国連のコフィー・アナン事務総長です。

この問題の解決には、とにかく昔、日本がよくやったと言いますか、日本人にとっては非常になじみの深い、実は刀狩りと同じですので、回収・破壊事業というのをやらなくてはいけないのです。では、回収・破壊事業をやる時に、どういう方法が一番効果的かということの一つの事例をジェンダーとの関係で説明しますと、実にこれをやる時に女性たちが大きな貢献をしてくれるのです。集落において回収・破壊事業をやる。プログラムをどういうふうにデザインするかということは非常に重要なんですけども、今イラクでやっているのがバイバック方式といって、実は正しくない方法です。バイバック方式というのは、カラシニコフ、カラシニコフというのは AK47 という武器範ちゅうなんですけども、AK47 を 1 丁持ってくれば 11 ドル払うというバイバック方式でやっているのです。1 対 1 のインセンティブ関係にあるのです。そういうことをやると、世界の各地ではうまくいかなかった事例が、先行事例がたくさんあるんですけれども、11 ドルももらえるのだから、たくさんの人が武器を作って、それから隣国から密輸して持ってくるわけです。地面を掘って、場合によってはアジア太平洋地域では、もう日本兵が残した武器を掘りあげて、何かきれいにしてサレンダーしてくるというような場合だってあるのです。ですから結果的には、軍縮しようとしたコミュニティに、たくさん武器がむしろ入ってきてしまう現象が見られたので、国連で私たちが提唱した方法は、ソーシャル・インセンティブの方法と言うんですけども、コミュニティ全体と一緒に、みんなを含めるかたちでインセンティブを与える。コミュニティに対してインセンティブを与え、一人ひとりには与えないと。でも、そのためにはコミュニティ全体が武装解除をされなければ駄目であるという考え方です。全員が武器をサレンダーしてもらいたいと。

例えば、1000 丁の AK47 を持ってきたら、そこに子供病院をつくってあげる、小学校をつくってあげる、保健所をつくってあげるという、こういうやり方なのです。そして公共事業も子供を中心のものを提案するのです。先ほどのステートメントで言った通り、最大の被害者は、今日の戦争での、そして小型武器での最大の被害者は子供ですから、そして人はかつて全員子供だったから、子供のことを中心にプロセスを

立ち上げるんだと言えば、宗派の対立とかグループの対立とか一応乗り越えられるのです。そうでない場合には、いや私たちはこの橋が必要だ、この道路の舗装が必要だということになるので、子供のことだと。

そうすると女性たちが、家の中に積んであった非合法の武器を大量に供出してくれるのです。女性が軍縮の最初の担い手になってくれ、そしてそのようにコミュニティレベルで武器回収が成功したコミュニティにおいては、実に非常に貴重な社会的な結果が得られるのです。それは、コミュニティが再生するわけです。戦争というのはコミュニティを破壊しますから、お互いがみんな疑心暗鬼になり、もはや村も集落もない。人がそこに居住して、自分で自分を防護するために大量のカラシニコフを家に持っている。そして、女も子供もみんな持つんだというような状態なんです。ですから、そういうところのコミュニティを回復させる。コミュニティとは何か、それは武器供出プログラム、回収プログラムに参加した範囲の家の集合だということになっていくので、そういうふうにコミュニティを再生させることもできる。

それから子供兵が最大の犠牲者だと言いましたけれども、小型武器は小さくメンテも簡単で、子供に持たせて兵士化できるということなのです。戦争が長引くと、戦争の中で子供兵からもう立派な大人兵になっている兵士たちもたくさんいます。しかし子供時代というのは、幾つになってもやり直さないと駄目で、すっ飛ばすことは人はいできないのです。子供時代というのをどうやってやり直すのか、どこでやり直すのか、もう親も家族もいない。結局子供時代というのは、コミュニティでやり直さないといけないのです。コミュニティを回復することによってしか、その子供兵のほんとの社会再統合“ Reintegration of former combatants ” というのはできないのです。ですから軍縮のそういうプログラムを設計するに当たっても、そういう和解のプロセス、ジェンダーの視点、子供への視点というものを織り込んだプログラムを設計する。これが勝負なんです。同じお金を使っても、そういうふうなプログラムを立ち上げれば一石何鳥にもなるんだということです。

そういう中に女性に焦点を当て、子供を最初の被益者にすれば、社会は間違えることはないということです。最大の犠牲者、子供の視点に立って、弱者である女性の視点に立てば、もう大体資源配分において間違えることはないというのが、私の軍縮外交の前線からの報告であり、またさらに私よりももっと前線の現場に立っているボランティアNGOの活動家からの私が受けた報告なのです。ですから、それを皆さんにフィードバックしたいと思います。

世界では小型武器、そして同時に対人地雷も通常兵器としては大きな問題です。対人地雷は、実際には日本が地雷除去活動のかなり活発な使命を自らに課して地雷除去活動を展開していますので、被害は大きく減ってきているのです。これは、オタワ条約という完全禁止条約があって、日本がメンバーになっています。私が軍縮大使の時に地雷除去常設委員会の議長職を執らなければ犠牲者減らしのリーダーシップがとれないと東京の本省を説得することに成功しまして、アジアからの初の共同議長になったのです。

なぜ地雷除去常設委員会が重要かと言うと、地雷除去にはお金がかかるし、技術が

必要なのです。ものすごく危険で、除去作業の途中で亡くなる運動員というのはたくさんいるのです。安全に除去できる機材を開発するハイテク能力があるのが、多分日本だろうと。ですから企業の皆さまにも応援をお願いしてもらって、今日の技術を、もっと軍縮を進めるために活用してもらいたいということをお伝えして、それが実現しつつあるのです。

地雷原というのはものすごく広い。先ほど子供の小型武器の被害の話をしましたけれども、地雷の被害はもっと悲惨で、過半数の被害者が6歳から12歳の子供なのです。なぜかというと、皆さんのように大人は私も含めて同じ道しか行き来しませんが、子供は好奇心に富み、山野を駆け巡りますから、子供だけが被害に遭うのです。だから悪魔の兵器と呼ばれるし、かつては戦争で戦力が乏しくなってくると、地雷原を最初に走らせるのは子供兵とも言われたのです。それは、その損失が正規の軍隊の損失につながるからと。ですから子供は最初の犠牲者だというのは、あらゆる事態について言えるわけです。もちろん、その子供たちを悲しむ母親がいる、もちろん父親も悲しむだろう、だからそこにはもうジェンダーの違いはない。だけれども大きなジェンダーの違いが出てくるのは、その若い犠牲者を生涯にわたって世話をするのは多くの場合、事実上女性なのです。それが今日の途上国の多くの“Post-conflict”の現場では、その女性たちの負担の大きさということも大きく議論され始めているのです。

ですから、その世界の地雷原をデマインすると言うのですけれども、クリアするというのを、やはり日本の軍縮外交は展開していかなければならないし、そのために日本の国内を動員するためにも議長職を執って、今、後任の大使がその議長職を引き継いでくれています。地雷につきましては、後、数週間で、ナイロビでオタワ条約発効以来の最初の大きな5年ごとに行われる“Review conference”という運用検討会議というのが行われますので、新聞にもたくさん報道が出ると思いますので皆さん参考にされたいと思います。

そういうその地雷の除去も含めて、今日、日本は科学技術立国としての強さがあります。今日の技術というのは、あらゆることが可能だと思います。それが、軍縮大使としてよく分かったことです。今までですと、技術があって、これはありがたいものとして使う。今日は、どういう技術も可能なんです。必要なのは、どういう技術が必要かということをも市民社会の側から注文をつけること、そうすると、そういうものができてくるんです。不可能なものはないんだということが分かりました。

ですから、人間社会にとって何が本質的に重要なのか、それを自分たちが自分たちとして答えを出せばいいわけで、その答えを科学技術者たちに伝えて、こういうのが必要なんだと。例えば核軍縮の分野では、核実験をやったときに、伝統的に地震波の測定技術が察知に使えますが、そうではなくて、気体中に放出される物質などがありまして、それを遠方からでも察知できる技術というのを今開発してもらっていますけれども、そういう技術が必要だと言えば開発できるのです。今度地雷原で亡くなる子供が多い。女性たちがその負担も悲しみも負うんだ。だから地雷原をクリアする技術が必要だと言えば、そんなものどんどんできてくるのです。

ですからサイエンス・ドリブンの、つまり科学が人間社会を先導するやり方ではなくて、人間が科学を先導するやり方に持っていくと、日本らしい答えを多くの世界の悲劇に対して出すことができるというふうにも思いました。そういう視点も、やはり女性のほうから見ていくと、だんだん分かってくるのです。やはり女性の、先ほどお伝えした嘆き、そしてその後負う生涯にわたる負担。自分も被害者かもしれないし子供も同時に被害者で、被害者が被害者の世話を一生するというような負担。もうそれは、日本も高齢化社会で介護の問題があって、どこか共通する、そしてそれは愛情から女性が過重に負担を負わざるを得ない。しかし世界の場合は絶対に許せない理由でそうなっているということ。その武器がそんなふうに放置されなければ防げた悲劇だというような共通のものを、私たちは女性として感じることができるから、防げる悲劇は防がなくては駄目と、声を上げていくのがやはり女性の責任であると思います。

日本で女性の社会参画はかなり進んできました。今日の会場には、こんなにたくさんの女性も男性も来てくださって大変うれしいと思うのですがけれども、もっと日本の女性が参画して、影響力を発揮できるように何が必要かということと一緒に考えてみたいと思うのです。

結婚して出産して、その間保育園が必要で、待機児童ゼロ作戦と。これは内閣府の男女共同参画会議で議員をやっていたときに、私も含めて提唱したことなのですが、そういうことが重要だということはありません。でもそれを越えて、もっと根本的なところで私は日本の女性はもっと勇気を持たなければ駄目だと思うのです。「3つの『ひ』」ということをよく言うんですけども、この会場でも以前に言ったことがあるから、何度も同じことを言われるなと思うかもしれないけれど、いまだにそういうのがちょっと見られるので、やっぱりまず「ひるまない」ということです。チャンスがあったら受けて立たなきゃ駄目で、必ず助けてくれる人がいるから大変でも頑張る。自分は器じゃないとか言わないで、ひるまないで受けて立ってということ。それからほかの人は「ひがまない」ということが重要だし、3つ目は「ひっぱらない」ということも重要で、「ひるむな」、「ひがむな」、「ひっぱるな」と。そして男性には、引き上げてと。引きがないと上に上がらないから、上に女性がいない場合には男性に引き上げてもらわないといけないから。

女性は全員が逆境で、そのことを認識する必要があるのです。そういう大状況についての認識があるかということ。一部の女性がより高い地位を目指すというときに、お互いにひがんだり、ひっぱったりなんかとんでもないことであって、小状況からしか物事を見てないというのは非常に残念なことです。全員が逆境だという認識を持ってお互いに励ましていくことが重要なんです。そして、やはりお互いに励ますこと、“Encourage”し合うこと、そしてお互いの良さを発見して、みんながオーナーシップを持ってこの男女共同参画のプロセスを国内的にも国際的にも推進し、助け合っていく。そのためには、逆境の認識というのが甘いと、いろいろなわがままが出すぎてしまうし、チャンスがあった人もひるんでしまうような思い切れないところも出てくるかもしれないので、みんながやはり戦いの中にあるんだという認識が重要と思うんです。全てのことは、今ローカルなところから始まらなければならず、グローバル化の中で、今、国連の話をしたように大きな流れがありますけれども、そういうのもローカルなところでフォローアップや実施がなければ全て空疎であ

ります。それは言葉の羅列であって、今、紛争地帯の話をしてしまったけれども、紛争地帯の話聞いて、皆さんが自分の現実の中で、やはり考えが深まると思うんです。またそういうことで思いをはせることもできるし、自分の置かれた不平等な状態ということ相対化してみてもう少し連帯感を世界と持てるかもしれないので、そういう世界大のレベルでやっていることというのは、やはりローカルの精神構造を強化していくために必要だろうと。だけれどもそれだけでは不十分で、ローカルな実施が必要なので、例えば北九州市の場合は、男女共同参画の具体的な改善がどういうふうに成されているかということ、皆さん一人ひとりが担い手として認識していただきたい。それがあって初めて国連レベルのプロセスで、何を言っても意味がある。

国連では、グローバルなレベル、リージョなレベル、ナショナルなレベル、そしてコミュニティレベルという4層で対応力を考えるというところが、様々な分野で概念化されていますので、私たちはコミュニティのレベルっていうところを今ここで担うという決意だと思うのです。けれども今日の会合は、このアジア女性会議との関連ですから、リージョなレベルでの取り組みを一緒にやっていくというところにつながっているし、そのアジアの取り組みは国連のプロセスに報告されますので、グローバルなレベルにつながっている。自分たちのやる実施の活動が、国のレベルにも報告されますから、そこにもつながっているのです。それからリージョなレベルにもこうやって直接に連携していますので、リージョナルな動きにつながっているし、リージョナルな動きと国の動きというのは国連プロセスに報告されますから、国連のプロセスにつながっているのだと、グローバルなものにつながっているのだと、そういうふうにイメージしてもらえるといいと思うのです。つまり、そのほんとの最終段階につながっている具体的なプロセスを自分たちは担っているのだと思ってもらえるといいと思うのです。先ほど英語で言ったような、個別の“Isolated category”のことじゃないということです。



それから今日は、ここにおいてになるような非常に意識の高い皆さんだから、やはり自分の具体的な経験を越えて、いろいろなことを想像できる人になって欲しいと思うのです。皆さんは直接に女性の差別、そういうことに直面、直接にはしていないかもしれないけれども、している人たちのことがイメージできるようになって欲しい。今日のお話も、前半の私のス

テートメントも直接には戦争の中にないわけだし、そういう小型武器の被害に遭っていないし、皆さんは地雷の被害者ではないのだけれども、そういうことをイメージできるか、自分の具体的な世界を越えた世界を考えることができるかどうかというのは、とても重要なことだと思います。それは一般的に、人はできないですね。だから人の能力というのは非常に乏しくて、自分の具体的に経験した範囲を越えることができません。私は教育者でもあるから、教育によって少しでもそれができるように、あるいはこういう企画は、そういうことを考えるきっかけになると期待しますが。

イマジンするという力は、本質的に人の能力の限界を突破することを可能にするのです。イマジンという歌があったでしょう。あれは、まさに人間にとって一番大事なことを歌っているわけで、イマジンできるかと、自分が具体的に経験していないことをイマジンできるか。戦争の被害というようなことを想像できるかということです。実は戦争の被害を経験している方が、この聴衆の中にもいらっしゃると思うのですけれども。

私が国連のプロセスで深く感じたことは、一番人間の能力のはかなさというか、少なさを突破するきっかけを与えてくれるのは、それは実は教育でも、こういう講師でもない、それは被害者の声なのです。被害者は、声を上げなければならないのです。上げてくれれば、その人が助かるのではないかもしれないけれど、自分の能力の限界を突破して、もう少しきちんとした想像や物事を考えることができる人になりたいと思っている普通の人たちを助けることができるんだということです。

それが、私は国連で、対人地雷除去や小型武器軍縮の議長をやっているときにお願いした方法論でした。多国間で物事を交渉して、全会一致で取り決めていくっていうことがもう不可能な時代と言われ、多国間主義は死んだと言われた時代でした。そこで自分が具体的に経験していないことをイマジンする、そういう議場であってほしいし、そうなればきっとその心をついに、大きな野心的なことではなくても、多国間で全会一致でプロセスを立ち上げることができるだろうと思ったのです。だから被害者に来てと、議場に来てとお願いしたんです。ところが被害者というのは、もはや声を出す余裕がないし、生きていくだけでも大変で、自分の村から出ることもできないわけです。そういう人に、国連で Raise Your Voice ! という、そういう活動に参加してと言っても全く意味がない。国連は一度も助けてくれたことがないし、今日のこの自分の現状を分かってもらえない。国連なんて遠すぎて、そこに行くために英語を練習したり、ペーパーを書いたり、考えられないということです。そういうことが重要ではなくて、一言でも来て言ってくれ。それはどんな政府代表が雄弁な演説をするよりも、どんな欧米、日本のNGOたちが彼らを代弁するよりも、決定的な能力の限界の突破を私たちに可能にしてくれるからということです。対人地雷の被害者、小型武器の被害者の声を議場に届けることが随分できました。

そうすると来て、彼らは世界が自分たちのことをこれほどに、やはり誠意を持って対応しようとしていると。ただ対応の仕方が分からなく間違っただけのことばかりやっているということに気付くから、正しい対応ができるように助けてあげようという気持ちになるし、そしてもっと重要なのは、それを聞いた各政府代表とNGOの人たちが、ほんとにその能力の限界を突破してくれることが可能になる。つまりほんとに分かってくれるということです。私がそれを推進した本当の狙いというのは、日本も被爆者、被爆国だから、日本の言うことを世界に聞いてもらいたかったからです。日本は大量破壊兵器の被害国だから、被害者の声を上げるといって運動を広く多様な分野で進めることで、世界が日本の言うことも聞くということにつながった。ですから核軍縮の分野では政治合意をつくることができ、日本の核軍縮に向けての新たな条約交渉の展望が開けたのです。これが今日の本題ではないのだけれども、次の核軍縮条約というのは、兵器用核分裂性物質生産禁止条約というもので、カットオフ条約という

のだけれども、核兵器の原材料の全世界での完全な生産禁止。これについての政治合意がようやく全核兵器保有国が納得するかたちでできたのです。アメリカもイエスの答えをくれました。

人間の安全保障というときには、結局その国家の安全保障というのがあるけれども、平和な国家の中の一人ひとりの人間が安全でないという状況もあるから、別の概念が必要になったのです。人間に焦点を当てるということです。そういう人間の安全保障をフォーカスする、どうやったらいいかということを考える中で、ジェンダーの参加ということも一つのインパクトとして期待されるということでした。そして、女性は被害者の最大のカテゴリーにもなるから、あるいは被害者の世話係の最大のカテゴリーにもなるからというような視点から、ジェンダーは人間の安全保障の問題に入っていくのです。でも、もっと根本的に私が重要だと思ったのは、被害者だからこそ持つエネルギーを、その具体的なプロセスに生かしていくことと思ったのです。私自身は被害者ではないけど、ほんとに被害者じゃないかなというふうに考えたときに、武器の被害者ではなくても、ジェンダーの少しは被害者だったかなと実は思う面もあるのです。

私は、アメリカで国際政治学を研究しなければならないと思いつめたのは大学を卒業した時で、それは最先端の研究がアメリカだからだと。アメリカに行って、まだアジアからの留学生というのは、全学部で1人しかとらないというような時代だったのだけれど、とにかくエール大学で専門教育を受ける機会があって、そこでもう歯を食いしばって頑張ってるんですね。やはり当時、思い出せば、エール大学の大学院でも女子学生は私だけだった。でもそのことは、アメリカではそれほど意識されないような扱いを受けたから、今思い出せばということだけだったのですけれども。でも女性で、アジアからで、成績が悪いと言われるのは絶対によろしくないと思っていて、ものすごく、がむしゃらにやった結果、どの学年でも1位でずっといったのです。ずっとエール大学から成績最優秀者に与える奨学金をもらって、学位を取ったのですけれども、日本に帰るという時になって、自分の指導教授に、「とにかく結婚もしているし日本に帰ります」と言ったのです。そしたら、「あなたは日本に行くは無職だ。ここに残ればアイビーリーグの主要校をはじめ、助教授のポストが保証される。どっちにするんですか。答えは明白でしょう。合理的選択をなささい」と言われたのです。私はその時いろいろ迷ったし、夫もそれだったらアメリカに自分も含めて行ってやってもいいと言ってくれたのだけれど、自分の社会を、自分の国を信じようかなと、そういうふうにどこか深いところでした。自分が積んだ国際政治、あるいは民主主義についての考え方を、やはり生かすのは自分の国でないとならないのではないかと思ったのです。それで帰って来たのです。それで無職でした。ほんとに毎日白いマンションの壁と向かい合って論文を書く、そういう日々でした。

だから大した被害者ではないけど、やはりそういう歴史は自分にあっただってということです。だからそれは大使としてのチャンスがあった時には、やはり人の2倍、3倍働くという動機付けにもなったんだと思う。被害者は、やはりどこかでそういうすごいエネルギーを持っているから、その記憶というのは忘れないですからね。でもその分先ほど言ったように、最終的にフェアな判断をしてくれる男性がいたから、今日の私の活動の余地というのが出てきているわけで、上智大学法学部に最初の女性の専任

講師として審査をしてやろうかと言ってくれたのは、男性の学部長だったし、その後最初の助教授、教授と法学部でなって、教授になると人事権があるからたくさんの女性の助教授を雇いました。それと同時に私が教え始めた時に5%が女子学生だったけれども、今では50%が女子学生で、ロースクールなどあって、みんな裁判官や弁護士を目指してやっている。

だから社会変化の速度って速いですよね。私だけではなくて、その時代を生きた一人ひとりが、何らかのある種の小さな被害者です。それは先ほどステートメントで言ったような、ほんとの世界の被害者と比べれば言うことも恥ずかしい。もともとこういうことをステートメントには書いてないわけだから、ほんの少しお話ぐらいにしかできない内容だけれども、それなりに戦ってきた歴史がある。女性大使は何人かはいるけれども、学者出身での大使ということでも初めてだったし、そういうジュネーブの現場でG8の主要国の中では、唯一の女性大使でしたということです。しばらくしたら、アメリカが大使を女性に切り替えたのです。結果的には、最初にG8の中で女性大使を送ったのは日本で、次いでアメリカです。ですから、差別というほどの大きなことではなかったけれども、苦労はあったということです。皆さんも一人ひとり、何らかのものがあるかもしれない。それを人さまに言うほどの差別の苦労などとは、おこがましくて言えないなとみんな思うと思うのです。でもどこかで、やはり少し歯を食いしばって頑張らなくてはならなかったという歴史があるかもしれないし、今その日々を生きているかもしれないけれど、それが力になります。チャンスがあった時は受けて立って、それをエネルギーの源泉にして、無数の人たちの分も頑張らなければという、かなりそういう純粋な思いというのが人に通じるのだと思うのです。

その国連の小型武器や地雷、それから先ほど言ったカトフ条約の交渉の場面で、あるいは政治合意をつくるための交渉の場面で、そのプロセスを立ち上げていく時に、先ほど言ったように不可能だと言われたけれども、そういう思いが人にどこか繋がるのですね。それは被害者の持つ思いだから別のテーマではあるけれども、やはり別の分野の被害者の気持ちも分かるしね。そのジェンダーの被害者というのは、戦争や武器の被害者と重なってしまう。だから、何重もの被害者にその人たちはなっているから、その人たちの声を届けて、そしてジェンダーの視点も分かってもらおう。国連のプロセスで女性の議長というのはほんとに珍しいと言われたのだけれども、議場でその女性が仕切る中で、みんなが言うことを聞いてくれるということに、なかなか慣れていない政府代表もいました。けれども、最後にはやはりフェアであるという議長のスタンスを分かってもらい、困難を抱えている人が乗り越えるのを助けるのが国連だという根本哲学を分かってもらおう。そして日本は、村社会によりみんなが含まれる社会をつくっていく国なのだから、インクルージョンと言うのですけれども、フィロソフィー・オブ・インクルージョン、包含性の哲学というのを活かして、全会一致ですべて進めるから、多数決にしないからということをつかしてもらい、誰でも、どの人にも反対のネームプレートを挙げてその議事を失敗させることができるという、自分が脆弱(ぜいじゃく)になりますけれども、そういう状況をつくって、全員的意思を引き出したということです。オーナーシップとその小型武器非合法拡散禁止への政治的意思を引き出すことができ、最後には、私と私の館員たちが書いた、大部の議長総括を付けた報告書が全会一致で採択されたのです。そのことは最近書いた「戦略的平和志向」(NTT出版)中にいろいろと書いていますので、もしご関心あったら読ん

でいただきたいです。

不可能と思われた全会一致のプロセスというのを、多国間主義を復活させながら実現することが、一部の分野に於いてできたと思います。それは、きっと小さな分野ですよ。私にとっては、50万人の命がかかっていることは決して小さく見えないけれど、世界で見ると小さな分野かもしれないけれども、外交戦略の一つとして小さな成功を重ねていくということが重要です。大きなことをやって自信喪失するより、小さなことの成功をお互いにかみしめながら進んでいくということが大事だと思うのです。

それから、やはり自分が闘ってきた道とか歩んできた道について肯定できないと駄目です。それを否定する人は、やはり自信喪失に繋がるから改革の担い手にはならないのです。大変だったけれども、自分で頑張ってくよくやったと思える人は、新たな時代の実担い手なのです。年齢は関係ないのです。だから、もっと自分が肯定できる女性という姿を追求してもらいたいと思います。人間の安全保障ということを考えるときに、まずは個々人として自分が自信を持っている。そこがまず安全にも繋がりますし、インプットができる、そういう新しいマインドを持つ自信に繋がります。

先ほど言ったように、人間の安全保障の概念というのは、要するに原先生もご説明されましたし、緒方先生もご説明されましたけれども、国家安全保障との対概念です。ですから、国家安全保障の枠組とは、例えば、安保条約、あるいは北大西洋条約機構、こういうのが国家安全保障の枠組なのです。でも、そういう枠組の中で、あるいは戦争が終わって平和となって、国家としては一応平和状態と認識されている中で、人間のレベルでみると安全ではない状態が多発しています。国家安全保障があっても、人間の安全保障がないという考え方が出てきたわけだから、ここでまず、国家安全保障がないと人間の安全保障もないかなど。しかし逆に、国家安全保障があっても、人間の安全保障があるとは限らないというところを、私たちは深く理解する必要があると思うのです。ですから、やはり戦争を終わらせ、平和構築をするというのがジェンダーのすべての問題の根本にあって、その中で女性が唯一人間の安全保障が剥脱（はくだつ）されているような、平和プロセスから取り残されているような現実に陥らないように、ウォッチしていくということが全体のポイントとなってきます。

ですから、ジェンダーの問題というのは、今日の私の話で総括的に申し上げました、大きなこの時代の戦争の姿はどういうかたちをしているか、どういう特質があるか、平和構築はどういうふうになさなければならないか、ということに繋がっている問題だと考えていただきたいです。ジェンダーだけの問題だととらえるべきではなく、戦争と平和に直結する分野で、ジェンダーの観点からそれを問い直すと、人間社会が平和を確立していく余地が大きいと。でもそのためには、女性が男性と同じ観点から物を見るのではなく、自信を持って女性の目から物を見るという活動を展開しなければならない。その意味では、女性は女性としてそういう強い視点を持ち続けることを改めて認識していく必要があります。そういうことを男性と意見交換する中で、男性もまた、新しい考え、新たな視点を実に生み出す側になってくれ、そういうパートナーシップの中でしか発展できませんから、今日はたくさんの男性の方も聴衆に来てくださっていて、まずはその方たちと連携するのが、私たちとしてまず一番のスタート

ラインではないかと思えます。

北九州市は、市長の非常に英明なリーダーシップもお有りのようで、祝福申し上げます。男女共に頑張って連携していくとよろしいのではないかと思います。東京もいろいろと努力をしていますが、すべてのローカルなコミュニティにおいて、手を携えてまいりたいと思えます。今日は長時間となってしまいましたけれども、聞いてくださってありがとうございました。

司会（三隅）

ありがとうございました。

いかがでございましたでしょうか。ジェンダーの視点から物を見るということは、男女ということだけではなくて、様々な面にかかわっていく。特に安全保障、人間が幸せに生きる原点にかかわっていくということで、男女が共に意見を交換しながら、いい社会をつくっていくとことになるということであつたと思えます。

これで基調講演は終わりでございます。午後は分科会がでございます。なお、お気付きかと思えますが、このプログラムの後ろにも書いてありますが、このスロープのところには子供たちが書いた絵が展示してあります。素晴らしく心を打つ絵です。ボスニア・ヘルツェゴビナの子供たちが書いた絵です。子供たちですから、ほんとに素直に描いています。そのことが、また私たちに真に平和な世の中であつたらいいなあと思わせるような絵です。是非、ご覧いただきたいと思えます。

ありがとうございました。午前中は終了いたします。

影マイク

先ほどご案内いたしましたように、分科会は、1時間ほどの休憩をはさみまして、午後1時30分から3つの分科会に分かれて行きます。

第1分科会は引き続きこのホールで、第2分科会は5階の小セミナールームで、第3分科会は5階の大セミナールームで開催いたします。レシーバーをご利用の方は出口付近でスタッフが回収いたしますので、ご協力をお願いいたします。

それでは、午後からの会議で皆さまにお会いできるのを楽しみにしております。ありがとうございました。